

■ 書 評 ■

大うつ病性障害・双極性障害 治療ガイドライン

日本うつ病学会 ● 監修
気分障害の治療ガイドライン作成委員会 ● 編

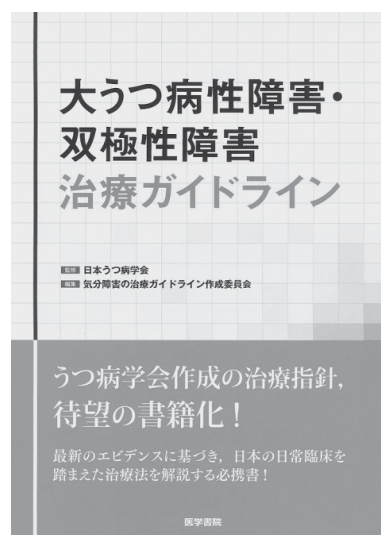
北海道大学大学院医学研究科教授・精神医学分野 久住一郎

本書は、日本うつ病学会の治療ガイドライン作成委員会が3年越しで作成した双極性障害ならびに大うつ病性障害の治療ガイドラインを書籍の形にまとめたものである。日本うつ病学会は、ガイドライン作成にあたって可能な限り最新の情報を提供することを重視して、学会ホームページにそれらを公開し、随時更新する方針で臨んでおり、本書の発行後も学会ホームページから最新情報を補完することを推奨している。また、本ガイドラインは、うつ病および双極性障害の診療の手引きになることを意図したものであり、実際の診療は医師の裁量権に基づいて行われるべきものであること、実地臨床においては多くの個別要因が臨床的判断に影響するため、本ガイドライン通りの診療でなければ正しい医療水準ではないとはいえないことを繰り返し強調している。

全体は3部構成になっており、大うつ病性障害と双極性障害の治療ガイドラインのほかに、患者さん向けの疾患教育に活用できる「双極性障害（躁うつ病）とつきあうために」が収録されている。大うつ病性障害のガイドラインは、うつ病治療計画の策定、軽症うつ病、中等症・重症

うつ病（精神病性の特徴を伴わないもの）、精神病性うつ病の4章立てになっており、双極性障害のガイドラインは、躁病エピソード、大うつ病エピソード、維持療法の3章立てで、それぞれのガイドラインには序文と簡単なサマリーが付されている。序文には、今回のガイドライン作成にあたっての理念が明確に示されており、全章が一体となって体系化されていること、アルゴリズム形式を取らないこと、エビデンスに準拠した治療法が推薦されているが、必ずしも保険適用の有無を考慮していないことなどが述べられている。

全体を通読してみると、特に「うつ病治療計画の策定」の章がエビデンスを基に日常診療の参考になるように非常によく書き込まれている。Minimum requirementが凝縮されており、初心者は読み流してしまうのではないかと危惧するくらい無駄な部分がない。その他の章も必要十分な情報が要領よくまとめられているので、通読するのがまったく苦にならない。本書は、かかりつけ医や研修医が通読して基本的な考え方を身につけるのに適しているのはもちろんのこと、ある程度臨床経験のある精神科医が時々読み返して自分の



診療を振り返るためにも絶好の書である。非常に完成度の高いガイドラインであるが、将来の改訂に向けての改善点をあえて挙げれば、双極性障害のガイドラインでは、「うつ病治療計画の策定」に相当する総論的な記述がなく、大うつ病性障害に比べて全般的にあっさりとした仕上がりになっていること、大うつ病性障害ガイドラインでは、「双極性障害（躁うつ病）とつきあうために」で取り上げられている妊娠・授乳中の薬物療法について触れられていないことくらいであろうか。

いずれにしても、本書は、単なる治療ガイドラインの域を超えた、レベルの高い治療指針の手引き書に仕上がっており、長期間にわたり心血を注いで作成に携われた日本うつ病学会の治療ガイドライン作成委員会の皆様に改めて敬意を表したい。

B5 頁152 2013年
定価：本体3,800円＋税
[ISBN978-4-260-01783-1]

医学書院刊